

中国における地方都市に在住する中年世代の老親扶養問題
～成功者規範の発生～

○李 しゅ (中央大学文学研究科)

本研究の目的は中国における地方都市であるZ市に在住するきょうだいがいる中年世代を対象として、彼らが直面している老親扶養問題を明らかにすることである。調査の結果、以下の二点が明らかになった。一つ目は、地方都市に在住する中年世代は親と子の両者を支えなければならないジレンマ状態に陥っている。二つ目は、きょうだい間の格差により老親扶養の負担が「成功した」人に押し付けられるということがわかった。

これまでの研究では、中国における家族関係を都市型の「リレー式」関係ないし農村型の「フィードバック式」関係として捉えている。都市化と市場化の進展に伴い、都市部において、欧米のように次世代に流れていくという「リレー式」の関係が形成されている。その一方、農村部には、伝統的な老親扶養は親が子どもを養育し、子どもが老いた親を扶養するという双方向的な「フィードバック式」の関係が形成されている(費 1983,1985)。

しかし、90年代以降、経済体制改革により、「単位制」が崩壊しているとともに、高齢者扶養システムはうまく機能しなくなった。また、女性の家庭内地位の向上につれて、家庭養老機能が弱体化している(王,海 2019:60-64)。したがって、家族関係において、縦軸の親子関係や世代間関係よりも、横軸の夫婦関係が重視されることになる(範 2013:90-95)。女性の家庭内の影響力が上昇する一方で、伝統的な家族構成と養老文化の影響が残存している。農村では、親が子どもに対して平等に扱ってれば、きょうだいでも平等に老親扶養が行われる。他方で、都市であれば、一人っ子は老親を扶養するが、一人息子のほうが一人娘に比べて老親扶養を行う傾向がある。一般的には、親子関係が良好であれば、老親扶養が行われる(張ら 2018:2761)。一方、他のきょうだいが老親扶養を積極的に担うならば、自分は親子関係が悪くても、他のきょうだい関係が悪くても、積極的になる。きょうだいによる老親扶養コミットによって本人のコミットの影響を受けることが知られている(張ら 2018:21-33)。

従来の研究では、子どもあるいは若年世代、中年世代、高齢世代のカテゴリー別の研究が重視されてきた。そのため、親子関係や夫婦関係などの家族関係に注目するものが多く、きょうだい間の関係については十分調べられていない。本研究はきょうだい間の関係に注目して、中年世代が老親扶養を担っている現状に至るまでのプロセスを解明するうえで、きょうだい間の格差がいかなる老親扶養に影響を及ぼしているのかを明らかにする。

本研究は長年中国河南省の地方都市Z市に定住し、中等教育以上の教育水準があり、当事者あるいは配偶者に安定した雇用があり、親も子もきょうだいもいる中年女性に焦点を当てた。筆者は2017年8月から2021年3月にかけて、対象となる中年女性とその家族に対する調査を実施した。住居構造、家族・親族構成、家事・育児・介護、仕事などの基本的な質問項目リストに沿いながら、比較的自由に話を聞く半構造化インタビューを行った。調査の結果、以下の三点が明らかになった。一つ目は、きょうだい間の不平等(経済・戸籍・教育など)により生じる一方的に流れていく支援、あるいは「成功した」人こそ他の「成功しなかった」親族に支援することが当たり前のように思われている点である。二つ目は、家族・親族内に経済的に余裕がある「成功した」人に老親扶養の負担が期待されている点である。三つ目は、「成功した」人は積極的に老親扶養を担っているが、他のきょうだいにも平等に親の面倒を見てもらうことを期待しているという点である。しかし、結果として、老親扶養が「成功した」人に押し付けられるという現実になっている。以上から、「成功した」本人の老親扶養のコミットがあっても、きょうだいのコミットが期待できない状態であるがゆえの苦悩・葛藤が明確になった。

しかし、対象とした家族はある程度経済的余裕がある家庭なので、最低生活保障に依存する経済的困窮者や再就職困難の失業者など、日常生活さえ維持できない家族の実態について十分に捉えられていない。また、地方都市の中間層あるいは富裕層について、異なる老親扶養のあり方を問うべきである。今後の課題として比較しながら深く分析していく必要がある。

キーワード：老親扶養、きょうだい間格差、成功者規範